

向井 孝

明治三十八年一月八日

一、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

明治三十八年一月八日に、向井孝は、明治三十八年一月八日に、

向井 孝^{たかし} 一九二〇年東京に生まれる。中央大学経済学部を卒業。その以前から新興俳句に力量を示す。太平洋戦争下、三島の重砲兵連隊に召集されたが身体故障で帰され、再召集も戦地には行かず。

一九四七年俳友山口英とガリ版詩誌『IOM』を創刊、一九六〇年五月に第六三集までつづける。その間『戦争』『平和』『イオム同盟詩集』等三つのアンソロジーの刊行に努力する。

『IOM』の主張と活動にはイオミズムの名称がある。戦後一時期のプロレタリア文学再生的民主主義文学の流行に自戒しつつ、主観を排する即物的な表現によって現実と相対しようとする態度に与えられたものであった。

一九四七年、日本アナキスト連盟に加入、姫路に在って詩活動と並行的に反戦平和の運動をつづけ、下からの非暴力なる民衆的反権力主義に終始してきた。

現在『コスモス』同人。

記録 1

一九四五年八月六日朝八時すぎ。

すでに警報はでていたが、その後情報もなかった。

やがてただ一機のB29が、広島のはるか上空を、銀箔のようにうつくしくうかびながら、ゆるやかにとんできたのだった。

x x x

丁度、そのとき、市内のとある銀行入口の石段にひとりのおとこがすわっていた。

おとこは少し、くたびれたようにうなだれ顔に手をあてて、何か考えている風にみえた。

しかし、それはまもなく銀行がひらくのを、所在なげにまっていたすがたかもしれない。

と、するどく皮膚をきりさかれたようないたみを感じ、とつぜんお

そこは、街中がまっしろにかがやくのをみた。

一しゅんおそってきたおそろしい爆風に家はおしつぶされ、街中のビルは、ごうごうと土けむりをあげながらくずれた。

おとこは立上りざま、体ごとがあんと石の柱にぶっつけられ、それから、どこへ消えたのか、あつというまもなくもうあとかたもなくなっていた。

x x x

が、ひとつ、おとこがその生身をもってこの世にのこしていったものがあつた。

おとこの五体が原子爆弾のまっしろなひかりに焼けただれたとき、すわっていた石段に、おとこの影がくっきりとおち、そのまま、御影石の表面にやきつけられていたのだった。

以来……………年。

うすあかくやけひびわれた石段のひとつところ、風雨にさらされるにつけ、おとこの影は月日と共に次第にあわくうすずみながら、も

の悲しげに浮きあがってきた。

その影はあの日のすがたそのまま、すこしうなだれて、石段の片隅にすわりこんでいるという。

x x x

街にはいつしかさまたまの家がたちならび、市電はつとめ人たちをいっばいのせて走りだしていた。

ふたたび修復した銀行へ、日々百千のひとつたちが石段をふんで出入し、そのまえをおびたいたい人波が一日中あるきつづけた。

だが、その影は、街のにぎわいにも気がつかぬように、顔のあたりに手をあてて、なにかくたびれきった姿で、ずっと考えこんだまままだという。

原爆による広島島の死者二十七万。

そのおとこがどこのだれで、なぜそこにいたのかさえ、いまは知るすべもない。

が、ひとしきり勤め人がゆきかえる夏の日のひけどき頃、丁度なが

れてくるうすい夕目をあびて、その影は、ふとほのじろくうきあがりながら、なにかを一心にかんがえこみ、いまもなおあの日そのまま、石段のかたすみに、じいっとしずかにすわりこんでいるのだという。

冬

一九四七年冬。

町は一日中火の気もなかった。

ひろい街通りにはうす汚れたビルが、はげた迷彩をのこしてしずかにならんでいた。

節電で運転をとめた電車の道のあちこちに、紙クズや枯葉がたまっ
てからから走っていた。

商店のおくでは、ローソクがゆらゆら暗くともっていた。

x x x

まばらな人影は駅へとうつむきかげんに、ひとりびとりあるいて
いた。

町角へくると、ふと何かがよりそってくるのだった。

宙にさげた手のひらに、配給タバコをひとつのせ、ちいさくささや

くのだった。

手巻き、二十円……

防空ズキンですっぽり顔をかくし、さむさにすけた人妻たちが、みれば、物陰ごとにひっそりとかくれて立っていた。

かげのようにとおりすぎる人影に、よりそっては一日中ささやきつづけているのだった。

手巻き、二十円……

× × ×

ひるがすぎ、曇ったままだいっしょかたぐれていた。

遠い空でかすかに退勤どきのサイレンがなっていた。

くらい夕ぐれの町すじから、どこからともなくよりあつてすこしずつ

つふえてきた人影がしだいに道すじをとおりはじめた。

手巻き、二十円……

女達のすがたをみると、つとめ帰りは、一ように足をはやめるようであった。

みんな上衣のえりをたて、手をポケットに入れ、くらい河のように、女達の前をひとしきり波だつてとおりました。

孤児写真集

もうこれで八日目。

駅前ひろばに十五枚ばかりのポスターがはられてある。

一日の乗降十二万人。

みんなそこをそろそろほこりをあげてあるいていく。

ぼくは毎日そのまえを通ってつとめにかよふのだ。

“この中に、あなたのお子さんはいませんか”

戦災孤児写真集

○森ヨシコ 十三歳 広島で戦災。大阪修徳学園。

○本田光雄 十二歳 名古屋で収容。三重国児園。

○吉川良一（推定）十一歳 長崎市より。奈良自学彊園。

ひとりひとりが名刺型のわくにかこまれた写真となって、ずらりとならんでいるのだ。

あたまのおできのあとがしろくぼやけたりほうたいで顔をかくした子もいる。

片えくぼをつくり、ちょっと小首をかしげまぶしそうにしわをよせているのだ。

ぼかんと口をあけてひょうきんな顔をしている。

くすりとわらったりしている。

十五だというのに、どうみても十ぐらいにしかみえないのだ。

その年齢をくらべると、みんなおどろくほど子供っぽくてあどけないのだ。

まるで育ちのよいしあわせな子供のようなんだ。

あかるくてほんとに、むじやきだ。

五年まえのあのおそろしい戦争のことはすっかりわすれてしまっている顔なんだ。

二度と戦争なんかおこりはしないと安心しきった顔なんだ。

今は誰もおこったりうらんだり、すねたりはしていないのだ。

もうこれで八日目。

ぼくはまい日、そのまえをとおってつとめにかようのだ。

みんなぞろぞろほこりをあげてとおりすぎる駅前通りのみちばたに、ずらりとならんで子供たちは毎日に黄色っぱく日やけし、破けて風にびらびらしながら、いつまでもわらったり、ちょっと小首をかしげてぼくらをながめているのだ。

風 景

むすめたちはリボンをつけていた。

わかものらは車窓にむいて、しきりにハモニカをふいた。

やがて、いつしか仲よくなると、さわぎながらいっしょにべんとう

をたべ、夏みかんをやりとりした。

絶間なくわらい声をあげ、流行歌をうたった。つかれると抱きあって、うとうとといつまでもねむった。

みんな大きな買出袋をいくつも持って、この国中をゆききするのだった。

風景

発車のベルが、プラットホームになりひびいた。

とつぜんリュックや手さげをもった一団が、いっせいに巡査の眼をかすめて走ってきた。

明るい悲鳴をあげて車窓からとび込むと、荷物をめっちゃめっちゃに投げこんだ。

汽車が動きたすと、背中や腹にくくりつけた米をとりだした。

若い娘が子持のような腹から米袋を引き出すと、みんなどっと笑った。

誰もかれも、毎日この線を往復する顔なじみばかりだった。

まるで遠足のように楽しげにさわぎながら、汽車にはこぼれてゆくのがあった。

言いなさい

言いなさい

言いなさい

さわさわ鳴り出す木を

だれとだれが買い占めたのか

言いなさい

言いなさい

たおれたままの椅子が

いつになると起きあがるのか

言いなさい

言いなさい

砂場であそんだ子らが
来なくなってしまったのはなぜ

言いなさい

言いなさい

昼間のような夜が

いま照しだしたものはなに

言いなさい

言いなさい

鳴りやまぬサイレンは

どうすれば止められるのか

言いなさい

言いなさい

どこまで飛んだら鳩は

自分の枝へかえられるのか

言いなさい

言いなさい

愛をたしかめるために

あと何人だけころせばよい

言いなさい

言いなさい

血にまみれた兵士が

ぼくの顔をしているのはなぜ

言いなさい

言いなさい

どれだけ歩きつづけられ
ぼくはきみに出会えるのか。

——ベトナム反戦、フォーク集会のために

恋 歌

——ふみきりはギロチン
こちら側に立っているぼくと
きみの方へいこうとするぼくを
まっ二つにする——

1

ある日
うしろからそっと追いついてきて
きみはとつぜんぼくに
眼かくしをした
とたんにぼくの肩から
蝶々になったきみが

ひらひら飛びたったのだ

2

と、視野一面

オレンジの闇が轟いて

日めくりを大いそぎでめくるように

縞模様 of 歳月が

音をたてて いくつもいくつも走りすぎた

眼かくしの指のすき間から――

3

やがて遮断機がゆっくり上ったとき

むこう側にみえてきたのは まったく見知らない町

いくらあたりをみまわしても

さっき一さんに駈けていった

きみはもうどこにもいない

4

そしてぼくが

いつまでも立ちつくしているのは

毎日みなれた つとめ帰りのふみきり道

もう とっくにひからびた夏菊を

まだ右手にもったまま

すっかり年老いて――

風景

1

ある日――

がらりと玄関の戸があく

しゅん間 わたしには判る

とうとうとりにやって来たのだ！

わたしはあわてて机の下や押入れをひっくりかえすが、見つから

ない

たしか五三年まえ

電車の網棚に投げた新聞のように

誰かから ぼいとあずけられた――

それが何であったのか

何であったのか

あれは――

2

もしや……退勤^{ひき}て帰っていく

ぼくではなかったか――

今朝、出勤の途中

地下鉄ナンバ駅千日前線のりかえ大エスカレーターの中頃で

すれちがいにゆっくり上ってきて

と、みるみる遠のき、つき放されるようにかき消えていった男は――

黒いベレー帽をかぶり

右肩を下げるくせの……

たしかに

二十二・三か、七十八ぐらいにみえた

あの男は――

ふと、道路の敷石をめくると
その下から　すが眼の男が
トランシーバーをもって
起きあがってきた。

ふんあっさりひっかかりやがった
と、また敷石の下へかくれようとする

待ってくれ、ちがうのだ

袖をつかまえたとなん

手錠がもうはまっついていて

私も一しょに

ずんずん地面へ沈んでいく

“山”と合言葉を叫んだが
もうおそい。

午後五時一分

タイムレコーダーをおしたら

がちやんと音がして

鳥打帽の男が

はずみをくらったように転げ出してきた

と、やにわにカードをひったくって

やっぱりオマエだな　と云うと

ぱっと身をひるがえし

地下鉄入口へと逃げていった

床にのこされたままの鳥打帽は
何の証拠にしたらいいか

ある墓碑銘

十一月のある日、姫路郊外にある市営栗林墓地へ、知人の骨上げに出むいた。

小春日のあかるい日差しをあびて、さまざまな墓石が光るようにならんでいる小路を、何ということもなく歩いて、ふと、ある墓に眼がとまった。

べつに特に風変わりだからというのでもなかった。

高さは台石をあわせてせいぜい二尺あまりの、いかにも安っぽい貧弱な墓である。

「尾形秀一の墓」

台座には横に、「友人一同」といかにも素人らしい下手な筆蹟のまきざまされていた。

その裏面（裏面の方が通りに面していたから表面であるかもしれない）

ぬ。）には左のような文句がきざんであった。

へ死人に口なしというな

思いきりうらんで死んだらう

秀一よ。

そしてこの墓は昭和五年にたてられたものらしかった。

私はしばらく、その墓の前に立っていた。

「友人一同」がこの墓をたてたところを見ると、この死者にはおそらく身よりもなかったのではあるまいか。

そしてそれはどのような生涯を送ったのであつたらうか。

「死人に口なしというな

思いきりうらんで死んだらう

秀一よ。」

私は口のなかにつぶやいてみた。

秀一とよばれる死者の、この世にのこした無言の聲が、ひとすじ秋空にたちのぼって、草の葉にゆれるかのようにであった。

そして彼の「友人一同」達が、さまさまの姿で立ちつくねながら、死体に対しているのが眼にうかぶようであった。

私はすこしのあいだ眼を闭じていた。

そのひとは地下足袋をはき、片手によれた手ぬぐいを丸めてにぎっていた。

ひとは若い風態の女だった。あるいはこの死者の愛人であったかもしれない。

又ひとは、鳥打帽からはみだすような長髪をして、腕をくんで立っていた……………

昭和五年といえは、満洲事変前夜の、嵐の予感に日本中がそよぐ時代であった。

そのくらい時代の波のなかに、この死者をとりまく、異様な風態をした、「主義者」とよばれる一団のひとびとが、面をあげて、精いっぱいの抗議の声をあげている姿が、まるで古びたフィルムを場末の活動小屋でみているように、脳裏を去来するのであった。

私はとじていた眼をひらいた。

……だが、それらはまったく私の文学的おもしろいすぎであるかもしれない……………

そして、私が、ようやくその墓碑銘を手帖にうつしおわって立去ろうとすると、俄に、どっと風がふいてきて、手帖ははらはらとひるがえりながら、はげしい白さで鳴りはためくのであった。